九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

広本方丈記における五大災厄の叙述について

春山，要子

https://doi.org/10.15017/12282

出版情報：語文研究. 17, pp.40-49, 1964-03-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

広本方丈記における五大災厄の叙述について

春山要子

方丈記における五大災厄の記事の有無は、広本と異本との両系統を区別する最も大きな点であると考えられているが、この部分の叙述は、文体の上から見ても問題を含む個所のようである。

先ず、広本方丈記にのみ見られる五大災厄の叙述には、「侍り」という語が、十二回乃至、十七回、使用されているのに対して、広本系統本の、その他の部分並びに、異本系統の本には、一回もこの語の使用がない。このような「侍り」の使用に対する、今迄の見解は、次の三、に代表されるようである。

(1) 読者を意識したためであろう。(1)

(2) 後人の挿入ではないだろうか。(2)

(3) 雅語用法であろう。(3)

これらの見解の中では、私は、(1)を支持する。然し、(1)の見解を支持するにしてもなお、その根拠には疑念が残った。方丈記は、随筆とはいいながら、周知の如く非常に自照性の強い作品である。そこで、読者とは、作者自身をも含めた対象である、と考える方が妥当なのではあるまいか。それはそれとして、なぜ、五大災厄の部分に限って、そのように対者意識が強く潜在したのであろうか。私にとって、これらの疑問を解く鍵の役目を果したのも又、やはり「侍り」の語であった。その「侍り」の用法は、係助詞を伴うものも多く、それによる何らかの効果をも企図しているように思われた。そこで、係助詞との関連において、方丈記全体をみた結果、五大災厄の部分の係助詞の特徴が明らかになり、他の部分とはひどく違っていることが解った。そして、これら「侍り」と係助詞の用法から考えて、この部分は他の個所に比べて、相当に和文的要素の強い文体なのではないか、と推定された。そこで、訓読系の文体の特徴を諸先学の著書に仰ぎながら、他の部分との比較をした結果、やはり五大災厄の部分が、他の部分とは非常に違った文体の個所であることを知り得たと思うのである。更に、この事実が、何を意味するかは、広本方丈記自身にとっても興味深い問題であるように思う。

一

方丈記の諸伝本については、鈴木知太郎博士の解説(4)によって、現在、写本、木活字本、板本の類を合せて、四十五、六本存することが明らかにされているが、そのうち、三十二本は詳しい解説があ

り、その内容を知ることができるのである。このたび、私の比較検討に使用した本は広本系五本、[5] 異本系七本、[6] 他に本文校異によってうかがうことのできたもの、広本十一、[7] 異本二、[8] であるが、五大災厄の記事に関しては、広本、異本両系とも例外が全く見られない。即ち、広本系では例えば、一条兼良本の如き、流布本の特徴たる「月かげは……」の歌を載せない写本でも、五大災厄の記事は存し、反対に異本系は悉く、この記事を欠くのである。流布本系は、古本系に武者の子圧死の一条を加え、この部分に五例の「侍り」が見られることも周知の通りである。処で、古本系十二、流布本系十七の「侍り」の用法を表示すると、次のようになると思う。

○ 用法中、動詞を動、補助動詞は一人称の主語に応ずるものを補一、三人称の主語に応ずるものを補三、と略した。算用数字は事例数。係助詞を伴なうものは（ ）内に語を示した。

第一表

	事例数及び用法（付）係助詞 大福光寺本	一条兼良本
安元の大火	補一（ゾ）1	補三（ぞ）1
治承の辻風	動 1	動 1
	補一（ゾ）1	補一（ぞ）1
福原遷都	動 1	動 1
	動（モ）1	動（も）1
養和の飢饉	動 1	動 2
	動（モ）1	
	補一（ナン）1	補一（なん）1
元暦の地震	動 2	動 2
	動（ヤ）1	動（や）1
	補一（コソ）1	補一（こそ）1
		補一（ぞ）2
		補三 3

「侍り」自体に即して云えば、既にご高説がある通り、[9] 平安末期には口頭語から退き、文章語化したものと考えられるのであり、方丈記の「侍り」が文語性のものであることは云うまでもない。然し、それは徒然草の用法に対して云われた如き雅語用法とは、[10] なお距離のあるものであると考えられる。むしろ、それは土田知雄氏が発心集の用法に言及されて「発心集の性格からしても、当然読者が予想されるのであるから、会話の手法を地の文に転用して、読者に親しく訴えようとしたものであると言えよう。」[11] と述べられたものに近いと考えられる。勿論、発心集の性格に方丈記を比べるのは無謀であろうが、然し、五大災厄の、方丈記中に於ける位置を考える時、又首肯できる点もないわけではない。五大災厄の位置は、方丈記一篇の結構から見て、発心集の説話に類似している点があると思う。いうまでもなく、この部分は、前、後半の構成の前半に属し、作者の人生観を述べる冒頭の一節を受けて、これを現実の世相に徴証するという、その実例の位置を占めているが、この部分は又、後半に対して、明らかに目的意識をもって書かれたものであると考えられるのであり、それは、閑居生活を肯定安心する目的とも考えられるし、ひいては又、同様の心境にある筈の人々に対して、発心を「親しく訴える」目的も潜在したのかもしれない。ともあれ、五大災厄の記事が、発心集の説話に於ける、発心の動機を語る部分と類似していることは否めないと思う。即ち、後半の叙述の前提としての五大災厄の叙述は、むしろ説得的になるのが当然であっただろうと考えるのである。このようにして、方丈記の「侍り」にはまだ対話意識が潜在すると私は考えるのである。

又、第一表に付した係助詞についてみると、一人称の主語に応ずる補助動詞の用法には、全て、強調を目的とする係助詞が伴われている。このことは「侍り」の使用とともに、五六災厄叙述の態度を明示していると考えてよいと思う。

二

係助詞による強意表現が前半に多いということは、既に土田知雄氏のご指摘があるが、[12]なお仔細に見ると、前半の中でも特に五六災厄の部分に集中して用いられ、他の部分の用法とは相当に違っている点が注目される。そのことを六福光寺本によって表示すると、次の通りである。

○「ハ」「モ」は、この表では省略した。（　）内は疑問語を伴う事例数である。

第二表

	前半 序	前半 五六災厄	前半 結	後半	総数
ナン	0	4	0	1	5
コソ	0	3	0	0	3
ヤ	0	8	0	0	8
ゾ	1（0）	8（1）	0	2（2）	11（3）
カ	3（3）	8（3）	1（1）	6（6）	18（13）

係助詞のうち、「なん」は、竹取物語では六部分が会話文中に用いられ、[13]又、表現主体が「物語」的態度によって表現を行なうときに多く用いるといわれている。[14]方丈記に於いては、古去系の全四例中、三例は係結となっており、六福光寺本によれば次の通りである。

舞人ヲヤトセルカリヤヨリイテキタリケルトナン。（1）

濁悪世ニシモムマレアヒテカヽル心ウキワサヲナン。見侍シ（2）

ヒタイニ阿字ヲカキテ縁ヲ結ハシムルワサヲナン。セラレケル（3）

スヘテ四万二千三百アマリナン。アリケル（4）

ムナシク六原山ノ雲ニフシテ又五カヘリノ春秋ヲナン。経ニケル（5）

これらのうち、（1）より（4）まで五六災厄中の用例であることは、この部分の叙述態度をうかがわせるものであると思う。

又、「こそ」は平安時代の物語、日記中では、会話文中に多く使われ、更に無名抄や発心集、平家物語、徒然草などにも用いられ、主観性の強い文中に多く使われると言われている。[15]方丈記に於ける用法は、会話文中のものでこそないが、特示強調の機能などに於いては同様であると考えられる。

彼ノ地獄ノ業ノ風ナリトモカハカリニコソハトソヲホユル（5）

京ノナラヒナニワサニツケテモミナモトハキナカヲコソタノメルニ（6）

ヲソレノナカニヲソルハカリケルハ只地震ナリケリトコソ覚エ侍シカ（7）

（5）においては、係助詞「ハ」を伴い、（6）においては、結びを備えず、（7）のみが係結の形を整えていることなどについては、後に一括してふれることとし、ここでは、これらの「こそ」が、全て五六災厄の中に用いられていることに注意したいと思う。

「や」と「か」とは、周知の通り主として疑問を目的とする係助詞である。森重敏氏は「「か」が課題の判断に疑問をもつその内容に多く向かっているのに対して、それももちろんあるが、一層あらわに聞き手に対する直接的な問いかけの意味合いをもつ。」[6] とのべておられる。又、阪倉篤義博士や春日和男博士によって「か」による疑問文が部分的であるのに対して、「や」は叙述全体を問いの形にもってゆくことが説かれている。[17] 方丈記中の「や」には、そのような疑問の場合と、その他、反語、並びに感動の場合とがあり、次のように文中にあるもの、又文末にあるもの、更に結びを備えているもの、省略されているものと種々である。

ホモトハ桶口富ノ小路トカヤ。(8)

其中ノ人ウツシ心アラムヤ。(9)

風ハツネニフク物ナレトカヽル事ヤアル。(10)

内裏ハ山ノ中ナレハ彼ノ木ノマロトノモカクヤトナカ〳〵ヤウカハリテ。(11)

タヘテノホルモノナケレハサノミヤハミサヲモツクリアヘン。(12)

モロ〳〵ノ辺地ナトヨクハヘテイハヽ際限モアルヘカラスイカニイハムヤ七道諸国ヲヤ。(13)

ハネナケレハソラヲモトフヘカラス龍ナラハヤ雲ニモノラム。(14)

ヲホカタソノナコリ三月ハカリヤ侍リケム。(15)

これらの中、疑問と目される(11)、(15)の場合も、半ば感動の意を含み、他の場合では反語が最も多く四例を占め、更に感動と目されるもの(13)、結びの省略されたもの(8)となっていて、一般に疑問よりもむしろ感動、強調的表現に傾いていることが注意される。

又、「か」の用例は、最も多く全十七例を数えるが、その中の過半数が五六災厄中に使用され、而もその六半が疑問語を伴わない用法となっていて、他の部分がすべて、疑問語を伴う点と異なっている。更に、結びの消えたものや、省略されたものは、五六災厄中の用例にしか見られない。即ち、序の部分に見られる二例と、前半の結びの部分に見られる一例、並びに後半の六例は悉く、結びを備えているのに対して、五六災厄中のものは、結びの省略されたもの六、結びが消えて文の続いているもの一で、結びのあるものは僅かに二例となっているのである。

又、「ぞ」は会話に用いられる率が低く、客観的なものゝ強調に用いられると考えられており、[18] 「相手に向かって押しつけがましい陳述である」と説かれている。[19] 而して、方丈記中の「ぞ」は第二表に見られる通り、六多数が五六災厄中に用いられ、しかも疑問語を伴わない強調表現となっているものが多い。なお、結びを省略するもの四例、うち、三例が五六災厄中の用例である。

以上、五語の係助詞についてみた結果、五六災厄の叙述は明らかに、他の部分の叙述とは異質のものであると考えられるのである。その相違点を今までは、この部分の特別な叙述態度に見ようとしてきたのであるが、すでにそのことは明らかであり、作者は五六災厄の叙述をなすに必ずや、自身をも含む読者を意識し、対話意識のもとに執筆したであろうと考えられるのである。次に、相違点はこのような作者の態度にとどまるものでなく、文体の上からみる時、和文的要素と訓読文的要素との比重が、五六災厄と他の部分とでは全

く逆になっている事実についてのべたいと思う。

三

訓点語に於いて、丁寧語「はべり」が見られないということは、早く遠藤博士が訓点語の敬語法についてのべられた中に、注意せられたことであるが、[20]更に又、六坪併治氏の挙げられた山田本法華経の「ハベリ」四例（動詞）[21]についても、「平安初期資料のみに見られる例外的な現象と考へる。」と築島博士が注して居られる。[22]従って、方丈記中の「侍り」については、動詞、補助動詞のいずれも和文系の語と解すべきであろう。又、漢文訓読語に於ける係助詞については、築島博士のご論考があり、それによってみるに第二表に掲げた係助詞がそれぞれ、訓読語系のものであるか、和文系のものであるかは明白である。即ち、「なむ」は訓読文では、説話的要素（物語的要素）を含む文献にも見出されず、[23]全く和文系の語と考えられる。又、「こそ」は、（5）（6）ともに和文の用法と考えられるものであり、[24]（7）も又、逆接条件句を成さず、[25]単なる強調をあらわし、和文の用法と考えられる。又「や」は文中に於いては、並列の形で述べられる以外は和文系と解してよいもののようである。[26]従って、（10）（12）（14）（15）は和文の用法と考えられるものであり、又、結びの省略された（8）（11）も同様に考えてよいものと思う。[27]そして、文末に用いられた反語の（9）の場合と、感動の（13）の場合とが、訓読系の用法と考えられる。[28]又、「か」については、「文中に於ける『か』は、平安時代の訓読に於ては、必ず疑問語の下に伴って用ゐられてゐる。平安時代の仮名文の例で見ると、和歌の中には、疑問語なしに文中に『か』が用ゐられることもあるが、一般の散文では疑問語と共に用ゐられるのが普通らしい。[29]」と説かれている。方丈記中の用例は、疑問語を伴わないもの五例（結びの省略されたもの四、結びが消えて文の下に続けられるもの一、全て五六災厄中にあらわれる）、下に疑問語を伴っているが、和文系の用法と考えられるもの三例（序の部分二、後半一）、明らかに訓読系の用法と考えられるもの四例（序の部分一、五六災厄一、後半二）、いずれともきめられないもの六例（五六災厄二、前半の結の部分一、後半三）となっている。そして、最後の六例中、五六災厄の叙述中にあらわれる次の用法は、助動詞「らむ」が結びとなっていて和文的であること、並びに「イヅクニ」の用法が陳述副詞のように用いられた場合でなく、場所を指示するものであることなど考え合せるとき、和文系の用法と考えてよいように思われる。

カハモセニハコヒクタスイェイヅクニツクレルニカアルラム

次に「ぞ」については、訓読で比較的多く用いられる係助詞であること、和文に比べて、文中に於ける用法は多くの場合疑問語の下に伴われること、そして疑問語のない文中で単なる強調として用いられる例は、非常に少ないことが説かれている。[30]方丈記中の用法においては、右のお説中の単なる強調が六多数を占め、而も、その六部分が五六災厄の叙述に集中している（第二表）。疑問語を伴う用法は次の通り、明白に訓読系とされるところのものである。

其ノ費ェイクソハクソ。

タヒ〳〵ノ炎上ニホロヒタル家又イクソハクソ。

ナンソイタツラニヤスミヨラン」。

以上、五語の係助詞について検討した結果を、第二表と同形式で表示すると次の通りである。

○ 訓読系／和文系 の記入法によって、その事例数を記入した。

（ ）内は、和文、訓読文のいずれの系統ともきめられない事例数である。

第三表

	前半 序	前半 五六災厄	前半 結	後半	総数
ナン	0	4/0	0	1/0	5/0
コソ	0	3/0	0	0	3/0
ヤ	0	6/2	0	0	6/2
ゾ	0/1	7/1	0	0/2	7/4
カ	2/1	6/(1)/1	(1)	1/(3)/2	9/(5)/4
計	2/2	26/(1)/4	(1)	2/(3)/4	30/(5)/10

ここに明らかに知られることは、五六災厄の叙述中には強調を目的とする係助詞が集中して用いられ、文体上、和文系の様相をもち、而も他の部分と比較するに、相当に大きなへだたりを示していることである。このような様相は又、「侍り」や、以上の係助詞に限らず、他の諸種の語にも見られるのである。

四

方丈記に於ける訓読文系の語法のうち、「（いかに）いはんや……をや」「いへども」「もし……ば」「もし……時には」「すなはち」などについては、すでに土岡知雄氏のご考察がある。そして、氏は「おおむね、漢文訓読から来ている語法は後半に多く用いられて、その簡潔明晰な表現に資している。そのうちで、『いはむや』がこの系統に属しながら、前半に多いのは興味がある。これは、この語の強意性が前半における情緒的表現に協力しえたからであろう。」[31] と傾聴すべきご見解をのべて居られる。而して、訓読系の語法が後半に多いということは、お説の通りであるが、なお、前半に於いても、五六災厄の叙述以外の部分では略、後半と同様な現象が見られる。

先ず、助動詞について、右のことを検討してみたいと思う。とりあげる語は主として、築島博士のご高著により、遠藤博士、中岡博士、外、諸先学のご高説を参照して選び、それ〴〵特有の語に限定したつもりである。[32]

○ 訓読系を(イ)、和文系を(ロ)、と略した。算用数字は、六福光寺本による事例数である。

五六災厄中の「ナリ」九例には「トモ」を伴って「ナリトモ」となっているもの二例、「テ」を受けて「テナリ」となっているもの二例、回想の「ケリ」を伴って「ナリケリ」となっているもの二例が含まれている。又、後半の叙述中に用いられた十五例

第四表 (イ)			五六災厄前後	五六災厄	後半
語	種類	活用形			
タル	断定	連体	0	0	1
ナリ	〃	連用／終止	0／2	2／7	0／15
ナラ	〃	未然	0	2	2
ナル	〃	連体	1	3	1
ナレ	〃	已然	1	1	1
リ	完了	連用／終止	1／1	1／9	0／10
レ	〃	已然	0	0	2
ザル	打消	連体	0	1	1
ザレ	〃	已然	0	0	3
シムル	使役	連体	1	1	0
シメ	〃	未然	0	0	1
ベカラ	推量	未然	1	2	2
ゴトシ	比況	終止	1	2	1
ゴトキ	〃	連体	0	0	1
ゴトク	〃	連用	0	4	1
計			9	35	42

中には、「ト」を受けて「トナリ」となっているもの二例、「テ」を受けるもの一例、「ユヘ」を受けて「ユヘナリ」となっているもの一例が含まれている。又、断定「ナリ」の未然形「ナラ」は、殆どが打消の助動詞に接続し、五六災厄中の一例は「ズ」に、後半の二例は「ヌ」「ネ」にそれ〴〵接続している。断定「ナリ」の連体形「ナル」は、中の二例が「ベキ」（五六災厄）と「ベシ」（後半）に接続している。又、断定「ナリ」の已然形「ナレ」は全て接続助詞に連なり、その語は「ト」二例（一例は序の部分、他は五六災厄中）「ハ」一例（後半）となっている。完了の「リ」は殆ど終止用法であるが、過去の助動詞「キ」の連体形「シ」に続くもの二例（序の部分に一例、五六災厄中に一例）、又、「トイヘトモ」に続くもの一例（後半）、接続助詞「トモ」に続くもの一例（後半）、格助詞「ト」に続くもの一例（五六災厄）をも含んでいる。完了「リ」の已然形「レ」は、二例とも接続助詞「バ」に続いている。打消の「ザレ」は二例が接続助詞「バ」に、一例が「ドモ」に接続している。又、使役の「シムル」は、序の部分の一例は係助詞「カ」の結びとなっている。推量の「ベカラ」は、すべて打消の助動詞「ズ」に連なる形となっている。比況の「ゴトシ」には、連体格助詞「ガ」を受ける「ガゴトシ」三例（各部分に一例）を含み、「ゴトク」も同様に「ガゴトク」三例（全て、五六災厄中）を含む。なお「ゴトシ」は、五六災厄中に、「ゴトク」は五六災厄と後半に、各一例見られる。而して、これらの助動詞が受けている語、又は後に接続している語にも又、両系の特徴の見られるものが多いと考えられるが、それは後に一括することとして次に、和文系の助動詞を、同じく六福光寺本によって表示すると次の通りである。

第四表 (ロ)			五六災厄前後	五六災厄	後半
語	種類	活用形			
ケル	回想	連体	1	8	1
ケレ	回想	已然	0	3	0
ケム	推量	連体	0	1	0
ラム	推量	連体	0	1	0
タレ	完了	已然	0	2	0
ヌ	打消	連体	1	4	4
ネ	打消	已然	1	2	2
ラレ	尊敬	連用	0	1	0
レ	尊敬	連用	0	1	0
計			3	23	7

右表中「ケル」は全十例中、五例が係助詞「ゾ」「ナン」に対する結びで、五六災厄前後の一例、及び後半の一例もその例である。結び以外の五例は、格助詞「ト」「ヨリ」、接続助詞「バ」、係助詞「ハ」、断定の助動詞、連用形「ニ」などに、それぞれ接続している。「ケレ」は全て接続助詞「バ」「ト」に連なり、「コソ」の結びとなっているものはない。「ケム」は、係助詞「ヤ」に対する結びである。又、「ラム」も係助詞「カ」に対する結びとなっている。「タレ」は二例とも接続助詞「バ」に続いている。「ラレ」は回想の「ケル」に、「レ」は同じく回想の「キ」にそれぞれ続いている。「ヌ」は、受ける語は、動詞三、形容詞一、形容動詞二、助動詞三、となっており、全て、体言に接続している。また、「ネ」は全て接続助詞に連なり、その語は「バ」四、「ド」一、である。

以上、六福光寺本の本文によって、訓読文、和文両系の特有の助動詞と見られているものについて、五六災厄の部分とそれ以外の部分との比較を試み、第四表の如き結果を得たのであるが、(イ)表に於ける五六災厄中の事例数は他の部分に比べて、決して少ないとは云えないが、(ロ)表との対照に於いてみるとき、その全体的な比重が既述の通り、他の部分とは逆であることが知られるのである。

次に、右の助動詞の接続に関して、接続助詞などを挙げたので、助詞についてみることにしたいと思う。語の選択は助動詞の場合と同様の方法により、明確なものに限定した。

第五表 (イ)		五六災厄前後	五六災厄	後半
語	種類			
ニシテ	(格)	0	0	2
ズシテ	(格)	2	1	1
トモ	接続	0	2	2
ドモ	接続	1	2	3
ガユエニ	(接続)	0	0	1
トイヘドモ	(接続)	2	0	5
ノミ	副	0	3	1
バカリ	副	0	3	4
計		5	11	19

○ ()を付したのは、その助詞と同じように用いられるので、それに準ずる意。

後半	五六災厄	五六災厄前後	第五表(ロ) 種類	語
1	0	1	格	へ
0	2	0	格	ニテ
4	6	2	接続	ド
3	7	2	接続	ツツ
0	9	0	副	ナド
1	4	0	副	ダニ
0	2	0	終	ヨ
9	30	5	計	

このように、助詞に於いても、助動詞の場合と殆と同様の結果が得られることによって、略、五六災厄の叙述の特殊な性格を前述のように推定することができると思う。なお、副詞、形式名詞その他、検討しなければならない語も多いし、又、六福光寺本のみでなく、少くとも四種以上の本について、比較検討の必要もあり、ほゞその結果は得ているのであるが、未だ不明確な点も多々あるので、この度は以上の如き中間報告にとゞめたいと思う。(昭和三八・一〇・二九)

註

(1) 武田孝著「方丈記解釈法」47ページ
土田知雄「方丈記の解釈と文法上の問題点」(「講座解釈と文法」5) 141ページ

(2) 吉池浩「方丈記成立考再説」(「国語教育」第六号) 8ページ

(3) 山田巌「平家物語の用語と語法」(「国文学解釈と鑑賞」二二ノ九) 41ページ
塚原鉄雄「鎌倉・室町時代の敬語」(「国文学解釈と鑑賞」二一ノ五) 14ページ

(4) 山田孝雄著「方丈記」(宝文館)所収の「方丈記諸本解説略」及び、「六福光寺本方丈記」(武蔵野書院複製)に付けられた「方丈記諸本解説」
前田侯爵家尊経閣文庫所蔵本(古典文庫所収、翻刻本)
一條兼良本(戸川浜男氏所蔵本の複製本、古典文庫所収)
嵯峨本(岩崎文庫所蔵本を底本として翻刻された、簗瀬一雄編「鴨長明全集」所収の嵯峨本第一種本文)
仁木宜春著「長明方丈記抄」(碧冲洞叢書第十九輯)

(6) 真字本、吉澤義則博士所蔵本(古典文庫所収の縮写影印本、並びに鴨長明学会発行の影写本)
長享本、東京大学国文学研究室本=森治蔵氏旧蔵本(古典文庫所収の本文)彰考館本(簗瀬一雄氏臨写複刻本、碧冲洞叢書第十二輯)
小川寿一氏所蔵本㈠同氏所蔵本㈡断簡(鴨長明学会発行、鴨長明叢書第一輯第一編及び、第二編。臨写複刻本)
延徳本、東京大学国語研究室本(古典文庫所収、縮写影印本)
小川寿一氏所蔵本(小川寿一氏翻刻、龍谷大学国文学会発行)

(7) 名古屋市立図書館所蔵本本文
川瀬一馬氏蔵、正親町家旧蔵本本文
木活字本（蓬左文庫所蔵本）本文
正保板本本文
首書方丈記本文
方丈記泗説本文
長明方丈記抄（加藤盤斎）本文
方丈記諺解本文
扶桑拾葉集所収本本文
方丈記流水抄本文
群書類従所収本本文
(8) 石田元季氏架蔵本本文
長亨本の吉澤義則博士所蔵本
(9) 吉澤義則著「国語史概説」43ページ
「国語科学講座」（明治書院）V、所収、吉澤義則著「日本文章史」47ページ
(10) 時枝誠記著「日本文法文語篇」64～65ページ
(11) 「方丈記の解釈と文法上の問題点」（「講座解釈と文法」5）138ページ
(12) 右同書、142ページ
(13) 三谷栄一著「竹取物語評解」73ページ
(14) 阪倉篤義「歌物語の文章―『なむ』の係り結びをめぐって」（「国語国文」二二ノ六）13～15ページ
宮坂和江「係結の表現価値――物語文章論より見たる――」（「国語と国文学」二九ノ二）47ページ
築島裕「漢文訓読語に於ける係助詞に就いて」（「語文研究」十号）29ページ
(15) 小久保崇明「係助詞『こそ』『ぞ』の強弱について」（「解釈」二ノ五）31～32ページ
(16) 森重敏「係結」（「続日本文法講座」1）44ページ
(17) 春日和男「万葉集の文法」（「日本文法講座」4）50ページ
阪倉篤義「反語について」（「万葉」二二）6ページ
(18) 小久保崇明氏前掲論文など
(19) 森重敏氏前掲論文、44ページ
(20) 遠藤嘉基著「訓点資料と訓点語の研究」192ページ
(21) 大坪併治著「訓点語の研究」302ページ
(22) 築島裕著「平安時代の漢文訓読語につきての研究」99ページ
(23) 右同書、715ページ
(24) 右同書、722～723ページ
(25) 右同書、718ページ
(26) 右同書、735ページ
(27) 右同書、735ページ
(28) 右同書、736ページ
(29) 右同書、727ページ
(30) 右同書、724ページ
(31) 土田知雄著、前掲書、150ページ
(32) 築島裕著、前掲書
中田祝夫著「古訓点の国語学的研究」
遠藤嘉基著、前掲書